

自然分娩と管理分娩の調和

森川 信博

森川病院院長(熊本市)

分娩なしでは人類は存在しえない。しかし、分娩への医学的干渉は人類の歴史からみるとごく最近のことである。医学的干渉は主として難産への対応であり、難産に対していかに対処し、予防するか、そのためには正常の分娩がどのような経過をたどるか、を知る必要があった。古典産科学において正常分娩の分析によって到達したのが分娩の三要素(産道、児頭、娩出力)である。われわれ産科医は、三要素が正常であり、均衡がとれていれば、分娩は正常に円滑に進行するものであるとして、異常が認められない限り、自然の経過に任せて「待つ」ことが、分娩取り扱いの極意と教えられてきた。

三要素の評価は分娩経過の予測上きわめて重要な位置を占め、分娩前も分娩中もこの三要素を注意怠りなく監視するように教育され、分娩に臨んだものである。

骨盤、児頭の評価にはレオポルド法に代表される腹部触診法、骨盤外計測に始まり、腹部計測、X線撮影、超音波の応用にまで至った。娩出力に対しては外計測、内計測法が開発され、児心拍数との同時記録で胎児仮死の予測を可能にして、分娩管理上の安全度は飛躍的に向上した。さらに子宮筋収縮薬、弛緩薬の開発は陣痛誘発、増強、抑制を人為的に調節し、計画分娩をも可能とした。

その他、吸引分娩、無痛分娩の研究、DHEA や PGE_2 などの頸管熟化薬の開発など、すべて産道や娩出力に関連して難産の要因を緩和することができ、分娩の安全性を高める上できわめて有効な手段を提供した。

医療として行なわれるこれらの分娩への介入は、医療者側の手段であって、産婦はこれらの介

入にあたってはすべて受け身の立場にある。しかし、自然分娩では、側面からのいろいろな介助あるいはサポートは行なわれても、分娩の主体は産婦である。古典産科学は分娩の分析から三要素に到達して、三要素の研究は分娩の安全性を高めたが、科学的分析には分娩の主体性に対する認識が欠けていた。三要素に代表される古典産科学から生み出される分娩の取り扱いに、何かひとつ物足りなさが感じられてきた原因は、その点にあったのではなかろうか。

古典産科学から周産期医学へ脱皮し、母体のみならず、胎児の安全性はさらに飛躍的に向上した。これは周産期医学の成果を基にして強化された管理に負うところが大きい。この「管理」という言葉が出現したのは比較的最近のことである。

分娩の異常は全分娩の約10%であり、他の90%はほとんど正常に経過するものである。しかし、安全性の完全な確保のためにはその90%も含めて管理しなくてはならない。管理を強化すればするほど安全性は確保されるが、最近重視されるようになった母子早期接触などができないことになる。自然分娩を見直す風潮は産婦の主体性の復権でもある。

分娩の分析に欠けていた産婦の主体性を取り戻すのに、これまでラマーズ法などがその教育の過程でわずかに役割を果たしてきたが、ソフトウェア式分娩や、リープ法分娩も有効な方法と考える。最近私の病院でも、東京警察病院が開発した、気功を応用したこのリープ法分娩を行なっている。さらに発展させ、安全度を高める管理分娩と、産婦の主体性を求めた自然分娩の調和が、今後の分娩法を模索するひとつの方向ではないだろうか。